

難波渦

2010.1
No.13

題字 浅野鈴秀氏（日本書芸院一科審査員）

国際フォーラム 豊臣期大坂図屏風の「謎」をとく

2009年11月8日（日）

会場：大阪産業創造館（大阪市中央区本町）

講師

バーバラ・カイザー氏

（エッゲンベルク城博物館主任学芸員）

イサベル・田中・ファン・ダーレン氏

（財団法人 日蘭学会）

跡部 信氏

（大阪城天守閣主任学芸員）

コーディネーター

高橋 隆博

（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター長）

オーストリア・グラーツ市で「発見」された「豊臣期大坂図屏風」をめぐる、当センターが州立博物館ヨアネウムと大阪城天守閣との3者間で、3年間の共同研究協定を結んだのが2006年。今年がその3年目にあたる。

この3年間に、「豊臣期大坂図屏風」をとりまく状況は、目まぐるしく変化してきた。中でも、2009年10月2日に大阪城とエッゲンベルク城の間で友好城郭提携が結ばれたことは、特筆すべきであろう。折りしも2009年は、日本とオーストリアとの間に国交が樹立されてから140年目の節目の年に当たる。友好城郭提携は両国の修好記念に花を添える形となり、その調印式にはオーストリア大統領も参列するなど、盛大なセレモニーが行われた。

友好城郭提携を記念する行事として、大阪城天守閣では特別展「豊臣期大坂図屏風」が開かれた。あわせて、当センターでも国際フォーラムを開催することになった。それが本フォーラム「豊臣期大坂図屏風の「謎」をとく」である。親善を記念する主旨から、大阪城天守閣からは主任学芸員の跡部信氏、エッゲンベルク城博物館からは主任学芸員のバーバラ・カイザー氏を、講師としてお招きした。また、日本とヨーロッパの交流という観点から、財団法人・日蘭学会のイサベル・田中・ファン・

ダーレン氏を講師に迎えた。参加者は168名であった。

跡部氏は、大阪城天守閣で開催された特別展「豊臣期大坂図屏風」の企画を担当された。特別展の準備を進める中で得られた新たな知見をもとに、「豊臣期大坂図屏風を読みとく」というテーマで講演を行なった。跡部氏は、「豊臣期大坂図屏風」に描かれた景観の細部に目をむけ、そこから読み取れる、屏風の特色や性格について分析した。



フォーラム会場の様子

「豊臣期大坂図屏風」は、画面中央に大坂城が大きく描かれる。対して画面の周縁部には、宇治平等院や住吉大社の祭行列、堺の町などが描かれている。大坂城については言うまでもないが、跡部氏は、画面周縁部に描かれた景観についても、多くは秀吉の事績や伝承との関連を持つことを解説した。

跡部氏は、「豊臣期大坂図屏風」の特徴は、細部の描写に「秀吉伝説」が散りばめられ、秀吉個人の人格的要素が強く表現されている点にあるとした。そして屏風制作の背景には、江戸時代初期にも続いていた太閤人気に影響しているのではないかとした。

この国際フォーラムは、「豊臣期大坂図屏風」を仲立ちとする、大阪とグラーツ、日本とヨーロッパの交流

が大きな目的の一つである。「豊臣期大坂図屏風」は17世紀中頃に日本で制作され、遅くとも18世紀初頭にはオーストリアに渡っていた。その間には、VOC（オランダ東インド会社）による貿易が、日本とヨーロッパをつなぐ役割を担っていた可能性が高い。

そこで、イサベル・田中・ファン・ダーレン氏に、屏風が日蘭貿易の商品としてどのように扱われていたのかをテーマに講演していただいた。ファン・ダーレン氏は、「オランダ商館長日記」の、1600年から1645年にかけての記事を調査した。そしてその中に、日本の屏風を扱った記録が22件あり、総計110双から120双の屏風が、商品あるいは贈り物として輸出されていることを紹介された。その他に、屏風の輸出に関する記事として、1641年8月に出された長崎奉行の禁令を紹介した。これは町や城、人物などが描かれている屏風の輸出を禁じたものである。

ファン・ダーレン氏によると、日本の屏風がオランダ向けの商品として、初めて正式に注文されるのは1642年のことであるという。バタヴィア（現在のジャカルタ）の総督から出島の商館長へ、「日本の屏風を20双～24双、ゴキブリ（の食）の害に耐えられるようにして送ってほしい」という依頼があったという。

ファン・ダーレン氏は、しかし屏風は、破損しやすいこと、船倉に大きなスペースをとることなどリスクが大きく、主力商品にはならなかったことを説明された。1646年6月にバタヴィア総督から出島商館長に宛てて送られた書簡には、もう屏風を送らないでほしいという内容が記されていたとのことであった。

最後に、バーバラ・カイザー氏が、エッゲンベルク城の歴史をひもときながら、「豊臣期大坂図屏風」がグラーツの地でどのような運命を辿ったのか、講演を行なった。

「豊臣期大坂図屏風」は、エッゲンベルク侯3代目のヨハン・ザイフリートの時代に、グラーツへ渡ったとされる。これまで、その入手経路については、芸術に深い



右：高橋 隆博センター長
左：バーバラ・カイザー氏

関心を寄せたヨハン・ザイフリートが、アントワープの美術商から購入した可能性が最も高いと考えられてきた。ところが、カイザー氏がエッゲンベルク家の文書類を詳細に調査したところ、1713年に作成されたザイフリートの遺産目録には「豊臣期大坂図屏風」とおぼしき品は記載されていないことが明らかになった。ザイフリートは、最初の妻に先立たれた後、1707年に再婚する。2番目の妻も1715年に若くして亡くなるのだが、カイザー氏の調査によると、この女性の遺産目録に「豊臣期大坂図屏風」と思われる記録が初めて登場するのだという。「豊臣期大坂図屏風」がザイフリートの2番目の妻の持ち物であったとすると、その入手経路についても、従来考えられていた「アントワープの美術商」とは異なるルートが考えられるとのことである。

3氏の講演を終えた後、高橋隆博センター長がコーディネーターとなり、会場からの質問を受けつつ討論を行なった。大阪城とエッゲンベルク城の交流を深める国際フォーラムにふさわしく、会場から「グラーツを訪れるのに良い季節はいつか」との質問が出された。カイザー氏によれば、冬の間（11月～3月）は博物館が閉館しているとのこと。博物館が開館している4月～10月は気候もよく、お勧めであるそうだ。

また、「豊臣期大坂図屏風」をめぐる、今後どのような展開を構想しているのか、との質問があった。高橋センター長は、「豊臣期大坂図屏風」がこれほど有名になってくると、個々人の思惑だけでは如何ともしがたいが、と前置きして、文化の栄えないところに未来はなく、市民の応援なくしては大阪とグラーツの交流も成功しないことを述べた。そして、今後も市民の皆様の応援をいただきたいと述べ、これをもって質問の答えにかえさせていただきたい、と結んで閉会となった。

（特別任用研究員 内田 吉哉）



右：跡部 信氏
左：イサベル・田中・ファン・ダーレン氏

文化遺産視察 福岡・佐賀の文化遺産

2009年11月18日(水)～11月20日(金)

福岡県・佐賀県

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターでは、年に一度、国内・国外の文化遺産視察を行なっている。現地を訪れてみて、「予想通り素晴らしいもの」もあれば「予想をはるかに超えて素晴らしいもの」もある。今回の文化遺産視察では、その後者との出会いに恵まれた。

視察の目的地は九州、福岡県と佐賀県である。漠然と南国のイメージを持ったまま福岡空港に降り立つと、意外なほど寒い。チャーターしたバスの運転士に聞くと、佐賀の山間部などでは、この時期に雪が降ることも珍しくないそうである。

初日は九州国立博物館を視察したのち、太宰府天満宮に詣で、多久聖廟と佐賀城をまわった。佐賀城は佐賀平野の真ん中にある。敷地内には、まったくと言っていいほど起伏がなく、まさに「平城」である。城に合戦時の防御能力を求めた様子がなく、学問が盛んだった佐賀藩の藩風が偲ばれるたたずまいであった。



多久聖廟前にて

2日目は、佐賀大学地域学歴史文化研究センターを訪問し、その後、佐賀県立九州陶磁文化館と、大川内山・伊万里の窯元を訪れた。

佐賀大学訪問の目的は、第3回目となる文化遺産学交流会である。地域連携に取り組む研究者間の情報交換が活発に行なわれた。

しかしこの日の見所は、なんとといっても九州陶磁文化館である。副館長の鈴田由紀夫氏にレクチャーを受けつつ、同館の展示を見せていただいた。展示の解説に先立ち、鈴田氏に「モノを中心とした研究」の考え方を手ほどきしていただいたのだが、さながら優れた研究者の頭脳を覗き見させていただく観があり、この視察の中で我われに最も強い印象を残した。



九州陶磁文化館にて

最終日は、唐津城、肥前名護屋城と、立て続けに二つの城をめぐり、福岡市博物館でしめくくるという行程である。唐津城は、佐賀城とは対照的に、海岸に突き出た小高い山に築かれている。山上の天守閣まで登ってみたが、天険を利用した要害は今も健在で、日ごろ運動不足の我われを苦しめるには十分であった。

肥前名護屋城は、豊臣秀吉が朝鮮出兵の拠点として築いた城である。わずか数か月で完成したといわれるが、普請好きの秀吉の性格によるものか、その規模は壮大である。当センターでは、「豊臣期大坂図屏風」(オーストリア・エッゲンベルク城博物館所蔵)の研究を行なっている。しかし豊臣大坂城は慶長20年(1615)の大坂夏の陣で焼失してしまった。肥前名護屋城は、「秀吉が築いた城」の雰囲気を感じ取ることができる、唯一の史跡であろう。野面積みの石垣に囲われた、複雑な配置の曲輪を歩きながら、「あの屏風」に描かれていた豊臣大坂城もこのようであったか、と思いをめぐらせた。

肥前名護屋城跡には、隣接して名護屋城博物館がある。ここで思いもよらぬ出会いがあった。この時期、名護屋城博物館では「肥前名護屋城と「天下人」秀吉の城」と題する特別企画展が開かれており、三井記念美術館本「聚楽第図屏風」が展示されていたのである。狩野派の手になる屏風と秀吉の肥前名護屋城跡とを同時に見比べる機会を得たことは、またとない幸運であったといえよう。

(特別任用研究員 内田 吉哉)



肥前名護屋城跡

第6回文化遺産学フォーラム

10月17日・24日の2日間にわたり、第6回文化遺産学フォーラムを開催した。今年度は、関西大学内と大阪市内の会場の2か所で開催するという、当センター5年目にして初めての試みとなった。

ことに10月24日は、関西大学のキャンパス内に幟のぼりが翻り、公演開始を告げる一番太鼓が鳴り響くなど、実りの秋らしく、華やかなお祭りムードに包まれた。

「なにわ・大阪 再生—大阪文化遺産の魅力—」

2009年10月17日(土)

会場：山本能楽堂(大阪市中央区徳井町)

基調講演：「古都おおさか再生へ」

河内 厚郎氏(文化プロデューサー/夙川学院短期大学教授)

パネルディスカッション

井上 宏氏((社)生活文化研究所「上方研究会」代表)

永井 芳和氏(元読売新聞文化部長)

河内 厚郎氏

吉田 光華氏(乙女文楽光華座主宰)

進行

藪田 貫

(なにわ・大阪文化遺産学研究センター総括プロジェクトリーダー)

文化遺産体験

乙女文楽 吉田光華氏

長唄 七福神

浄瑠璃 艶容女舞衣はですかたおんなまいぎぬ～酒屋さかやの段だん

10月17日開催の「なにわ・大阪 再生—大阪文化遺産の魅力—」は、大阪市中央区にある山本能楽堂において、フォーラムと乙女文楽の上演を行った。

昭和2年(1927)、先代山本博之氏によって建てられた山本能楽堂は、戦災で一度は焼失したが昭和25年に再建され、平成18年(2006)には伝統的な能舞台をもつ能楽堂として、国の登録有形文化財に指定された。



参加者を魅了する優美な演技



華やかにオープニングを飾る「七福神」

音響効果をよくするために、舞台下には大きな瓶が12個並べられているという。どっしりとした重量感のある趣深い雰囲気の中、今年のフォーラムははじまった。参加者は100名だった。

まず、吉田光華氏による乙女文楽 長唄「七福神」がオープニングを飾った。三人の男性が一体の人形を遣う文楽とは異なり、一人の女性が一体の人形を操る乙女文楽は、女性ならではの優しく柔らかな動きが特徴であり、魅力



パネルディスカッションの様子

でもある。昭和初期の大阪で誕生したが、戦争のためやむなく解散。長らくそのままの状態だったが、平成4年、吉田光華氏によって約55年ぶりに復活をとげた。

基調講演では河内厚郎氏が、古代以来、連綿と受け継がれてきた、なにわ・大阪の歴史をひも解き、その歴史と文化の蓄積が、現在の大阪文化遺産の魅力につながっていることを説き、参加者は熱心に耳を傾けていた。続くパネルディスカッションでは、藪田貫総括プロジェクトリーダー進行のもと、パネリストとして井上宏氏・永井芳和氏・河内氏・吉田氏が大阪文化遺産の魅力を語り、今後の大阪のあるべき姿、再生への方途についての議論が交わされた。

最後は、再び吉田氏による乙女文楽 浄瑠璃「艶容女舞衣～酒屋の段」が上演され、しっとりとした雰囲気の中、フォーラムは終了した。

「なにわ・大阪 再生」。今年の文化遺産学フォーラムは、

まさにこのテーマに合致した濃厚な内容だったと思う。「文化は再生される」ことを実感するとともに、地域のなかで育まれた文化遺産をどのように将来につなげていくか、フォーラム参加者の方がたにとって、その方途を考える有意義な機会となったのではないだろうか。

フォーラム開催にあたり、会場をお貸しいただいた山本能楽堂のみなさまをはじめ、関係者の方がたには多大なるご協力を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

(歴史資料遺産研究プロジェクト R.A. 松永 友和)



能勢人形浄瑠璃を熱く語る松田正弘氏

特別公演 能勢人形浄瑠璃の世界

2009年10月24日(土)

会場：関西大学第1学舎 千里ホール

10月24(土)、関西大学第1学舎千里ホールにて、第6回文化遺産学フォーラム「特別公演 能勢人形浄瑠璃の世界」が開催された。2007年の第4回文化遺産学フォーラムに引き続き、ろっかくざ鹿角座をお招きして能勢人形浄瑠璃を上演していただいた。演目は、「能勢三番叟」のせさんぼそう「傾城阿波の鳴門～巡礼歌の段」けいせいあわなるとじゅんれいうた だん「壺坂観音霊験記～山の段」つぼさかかんのれいげん き やま。300人を超える方がたにお越しいただき、会場は熱気に包まれていた。



能勢三番叟

オープニングの「能勢三番叟」では、町の名所や特産物が歌詞に織り込まれた浄瑠璃ののせて、男女ペアの人形が可愛らしい舞を披露した。次の「傾城阿波の鳴門」では、西国巡礼に出たおつると、わが子と知りながら名乗れない母親お弓との切ないやり取りが情感豊かに演じられた。そして、最後の「壺坂観音霊験記」では、盲目の沢市とその妻お里の夫婦愛が見事に表現されていた。

人形浄瑠璃では通常、「壺坂観音霊験記」に登場する観音様は、女性の人形の首を使用しているが、能勢人形浄瑠璃では、観音様の人形を一からデザインし、作製された。まばゆい光を放つ観音様に、参加者は驚きの声を

上げていた。また、上演の合間には、座員による演目の解説や体験も行なわれた。特に人形の所作体験では、留学生も参加し、和やかなひとときとなった。

当日は、人形浄瑠璃の上演だけでなく、浄るりシアター館長松田正弘氏による講演も行なわれた。松田氏には、能勢の地で今日まで200年にわたり受け継がれてきた「素浄瑠璃」(語りと三味線だけで物語が進められる浄瑠璃)を地域の財産として守り、さらに次世代へと発展させるために、囃子と人形を加えて人形浄瑠璃の劇団を旗揚げしたという経緯を中心にご講演いただいた。

センターでは、文化遺産を「現在に生きる遺産」としてとらえ、調査・研究を進めているが、能勢人形浄瑠璃こそ、まさに“Living Heritage”を体現していると思われる。このような地域に根ざした文化遺産を地域の人びととともに考えていくことが、センターに与えられた使命なのだということを強く感じた一日であった。

(学芸遺産研究プロジェクト R.A. 中尾 和昇)



壺坂観音霊験記

第8回 NOCHS レクチャーシリーズ 「豊臣期大坂図屏風」～日本とヨーロッパの交流～

2009年7月15日(水)

会場：なにわ・大阪文化遺産学研究中心 実習・展示室

朝治 啓三(研究員/関西大学教授)

内田 吉哉(特別任用研究員)

今や、「豊臣期大坂図屏風」の研究は、当センターの中でもとりわけ注目を集める活動の一つである。これまで、その研究は画面に描かれた絵画情報を読み解くことに主眼が置かれてきた。しかし今回のレクチャーシリーズでは、「豊臣期大坂図屏風」を軸とした、日本とオーストリアの交流をテーマとし、この屏風がオーストリアでどのように扱われてきたのか、センター研究員による講演を行なった。参加者は126名であった。

講師の一人は、朝治啓三氏(当センター研究員/関西大学教授)である。朝治氏はイギリス中世史を中心に研究している。今年度より新たに当センターの研究員に加わった。「豊臣期大坂図屏風」の研究体制、とりわけ日本とヨーロッパの交流に関する分野の研究を強化するためである。



朝治 啓三氏

今回のレクチャーシリーズでは、オーストリア・ウィーンのシェーンブルン宮殿 IPR (Institute for the Paper Restoration) の報告書をもとに、「豊臣期大坂図屏風」の修復について講演した。

「豊臣期大坂図屏風」は、EU「Culture2000」プログラム中の「Wall & Paper」プロジェクトの援助により、2001年から2004年にかけて修復が行なわれた。その際、あわせて損傷状況や顔料の化学分析などが調査されている。

朝治氏によると、「豊臣期大坂図屏風」は、18世紀に8枚のパネルに分割され、エッゲンベルク城「日本の間」の壁に嵌め込まれた際に、各扇の周辺部分が損傷し、油絵具で上塗りされているという。また屏風の下張りに布

地が使用されており、これも18世紀にヨーロッパで施された修復の跡だということである。

朝治氏は、シェーンブルン宮殿 IPR の化学分析は、屏風に使われている顔料が日本製かヨーロッパ製かまでは識別していないことを指摘した。その上で、「豊臣期大坂図屏風」の画面の中で、描写に疑問がある部分は、エッゲンベルク城博物館主任学芸員バーバラ・カイザー氏に追調査を依頼する必要があるであろうとした。

講師の2人目は、内田吉哉(当センター特別任用研究員)である。関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究中心は、州立博物館ヨアネウム(オーストリア)と「豊臣期大坂図屏風」の共同研究協定を結んだ際に、シェーンブルン宮殿 IPR での修復の様子を撮影した写真の提供を受けた。内田は、それらの画像を調査し、「豊臣期大坂図屏風」がオーストリアでどのように扱われてきたのかについて講演した。

まず、内田は修復前の画像から「豊臣期大坂図屏風」の画面に付箋が貼られていた痕跡を数点紹介した。現在この屏風には、大坂城本丸から北側にかかる極楽橋の部分にのみ、付箋が残されている。内田によると、元は他の寺社や船などにも付箋が貼られ、その名称が記されていたのであろうとのことである。

続いて内田は、屏風が18世紀にヨーロッパで修復されたことを示す史料を紹介した。屏風の下張りには、朝治氏の講演でふれられた「布地による修復」の他に、聖母子像をあしらった印刷物が含まれていた。こうした修復の跡について、内田は、「豊臣期大坂図屏風」がグラーツで大切にされてきた証拠であると述べた。そして、屏風が8曲1隻の原型を留めていないことは残念であるが、エッゲンベルク城「日本の間」に飾られている現状は、オーストリア18世紀の東洋趣味を表わす重要な文化遺産であり、今やこの屏風が日本とオーストリア双方にとって貴重な存在となっていると語った。

(特別任用研究員 内田 吉哉)



内田 吉哉(特別任用研究員)

御堂筋 kappo 2009

2009年10月11日(日)

会場：御堂筋(大阪市中央区)

かつて大阪の秋の風物詩であった御堂筋パレード。それに代わって2008年から行なわれているのが御堂筋kappoである。この日は、御堂筋を北は淀屋橋から南は新橋まで歩行者天国として開放し、会場はいくつかのゾーンに分けられる。市民団体の活動紹介や、地域物産展、子ども向けの企画や、スポーツ体験コーナー、環境とエコをテーマにしたプログラムなどが催され、イチョウ並木の下、さまざまなブースが軒を連ねた。



来場者でにぎわうブース前

センターでは、関西大学博物館として「大阪ミュージアムゾーン」の一角に出展し、高松塚古墳壁画の模型と、まきむらしろう牧村史陽の古写真、そして秋に開催されたセンターの行事案内ポスターなどを展示した。当日は古墳の模型を目印に、沢山の方が足を踏み入れてくださった。牧村史陽の写真は昭和30年代から40年代の御堂筋周辺を写したものを10点ほど展示したが、こちらも多くの方に興味を持って見ていただくことができた。



展示の様子

ところで、この御堂筋 kappo への参加は今年が初めてであったが、作業に際して最も懸念されたのは、当日のスケジュールが厳しいことであった。大阪一の日抜き通りを交通規制するだけあって、設営と撤収の時間は極めて短く、また一刻の猶予も許されない。わたしたちは、古墳模型の組み立てを予行練習したり、古写真を一枚の大判パネルにまとめて掲示するなど、設営と撤収を円滑に行なえることを優先させて準備を行なった。



淀屋橋北側より阪急百貨店をのぞむ
(昭和37年9月17日、牧村史陽撮影)

このように、今回は時間と空間の限られた展示であったが、そうした条件に合わせた企画や仕様を考えること自体、文化遺産学の成果を発信していく一つの方法として有意義であった。また、展示物が少ないことで、逆に来場者の方とのコミュニケーションを多くとれたことも収穫であった。とくに牧村史陽の映した昔日の御堂筋を見て、何気なく交わされる会話も、実際にその風景のなかを生きてきた方の話には重みがあった。

「関西大学」の看板を見て足を止め、展示を覗き、そしてご自身と関大との縁をお話して下さった方。古写真の風景を見て、結婚前に御堂筋界わいで仕事をしていた時分を思い出された女性。それらはささやかで個人的であってもかけがえのない思い出であり、どんな風景にもそうした人びとの「思い」が詰まっている。「文化的景観」と言うとき、それは本来的に、人びとの「思い」が集まってつくりだされたものを意味するのかもしれない。

文化遺産とは、いわば「思い」の結晶なのではないか。そう自分なりに実感した一日であった。

(生活文化遺産研究プロジェクト 石本 倫子)

「豊臣期大坂図屏風」、テレビに登場

2009年10月31日(土)、NHK デジタルBS ハイビジョンにて「ハイビジョン特集 新発見 大坂図屏風の謎～オーストリアの古城に眠る秀吉の夢～」が放送されました。



エッゲンベルク城での調査の様子

「鬼洞文庫一枚摺データベース」の公開

センターでは、関西大学総合図書館所蔵の鬼洞文庫一枚摺の調査をもとに、「鬼洞文庫一枚摺データベース」を、センターのホームページ上に構築しました。データベースを通じて、大阪の文化遺産に触れていただければ幸いです。



検索結果の例

News Letter『難波渦』の発行をふりかえって

本センターは、平成17年4月に文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業として発足して以来、日ごろの調査・研究や行事などの活動を多くの方がたに知っていただくため、News Letter『難波渦』を発行してきました。センターが本年3月で、5年間の活動を終了するため、本号が最終号となります。

『難波渦』は、当センターにとって最初の発行物でした。No.1には、高橋隆博センター長により、なにわ・大阪の地に受け継がれてきた文化遺産の調査・研究を通して、「文化遺産学」という新たな学問体系を構築し、その成果を地域に還元していくことが目的であるとの構想が綴られています。センターの活動の広がりとともに、紙面には色鮮やかな写真が増えるようになり、No.4からは、デザインが一新され、題字や小見出しの背景には“難波渦”から連想される波模様が入りました。

『難波渦』は、編集や執筆などをP.D.・R.A.が中心となって取り組んできました。最終号の発行にあたって改めて読み返してみると、目標に向かって試行錯誤してきた5年間の思い起こされるとともに、センターを通じて多くの方がたとの出会いがあったことに気づかされます。

News Letter『難波渦』の発行は、私たちにとって、新たな学問体系である「文化遺産学」を切り拓いていくための、大きな一歩になったと感じています。



編集後記

『難波渦』No.13をお送りいたします。2009年下半期は、様々な行事が目白押しで、あっという間に月日が過ぎ去りましたが、充実した日々を送れたように思います。『難波渦』は、今回が最終号となります。5年間、センターの活動にご理解とご協力をくださり、見守り続けてくださいました皆様に、心からお礼を申し上げます。

本年も何卒よろしくお願ひ申し上げます。

(祭礼遺産研究プロジェクト R.A. 藤岡 真衣)

文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業
オープン・リサーチ・センター整備事業(平成17年度～21年度)
なにわ・大阪文化遺産の総合人文的研究

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

News Letter 『なにわがた難波渦No.13』

発行日 2010年1月31日

発行所 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

発行者 高橋隆博

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

TEL 06(6368)0095 Fax 06(6368)0092

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/home.htm>

E-mail naniwa@jm.kansai-u.ac.jp

印刷所・編集協力 (株)NPC コーポレーション